

「音読から Story Tellingへ」の巻

高梨庸雄 Takanashi Tsuneo
(京都ノートルダム女子大学教授)

1 創造的音読

学習の初期においては正確な音読を心がけることも大事であるが、正確さだけを意識していると音読の楽しさを体験できない。音読に慣れたら「自分の読み方」をしてみることも必要である。音読は題材に対する自分の解釈を表現するパフォーマンスだからである。そこで今回は創造的な音読の仕方を工夫してみよう。

題材として、NEW CROWN BOOK 2, LESSON 9, Landmines and Children を用いて具体的な手順を述べることにする。

What is this? It is a danger sign. Signs like this are seen in the forests and fields of Cambodia. What is the danger? Landmines.



These Cambodian children like to play in forests and fields, just like you and me. But some of them are killed and many others are injured. Landmines do this.



1) 文章の要点がわかるように数回黙読する。

授業で新出語や文法を含む通常の学習は済んでいるものとする。受動態が初出なので by agent の有無について理解が不十分な生徒もいるかもしれないが、生徒には文法よりもその課の内容理解に集中させる。

2) 文章を声に出して数回読みながら、発音に自信のない単語に下線を引く。

黙読の時にも文章が読む生徒にとって難しい場合には、内的音声 (inner speech) と言って、声には出さないが「読んでいる」ことがあり、その時、いまだ自信の持てない語句の発音に気づくことが多い。辞書で確認させる習慣を身に付けさせたいが、生徒が辞書を持ってきていない場合や教室に置いていない場合は、NEW CROWN 末尾の「単語の意味」を活用してほしい。あるいは読み方に自信のない単語がどれくらいあるかを確認して、多い場合にはテープや CD あるいは教師の肉声によって音声インプットを行う。

3) 自分にとって自然な読み方でポーズを置きたい箇所に斜線 (/) を入れる。

生徒が一呼吸で言える文の長さには個人差がある。これは生理的な要因よりも英語と日本語の構造上の相違や音読に慣れていないことが要因となっていることが多い。例えば上記引用文の3番目の文である Signs like this are seen in the forests and fields of Cambodia. を一息で言えない生徒も少なくない。その場合、Signs like this と言って標識を見せながら一息ついて、それから文の残りを読み続ける。それでも生徒が長すぎると感じるようであれば、Signs ~ seen までを一息で読ませて、カンボジアの地図や写真を見せながら in the forests and fields of Cambodia. と続ける練習をする。そして最終的には文全体を一気に言えるように指導したい。このように音読は意味のまとまり (sense group) について生徒に考えさせる機会ともなる。

4) 文章の中で、自分が音読するときに重要だと思う語句に波線を付ける。

上記2つの段落で何が重要な語句かと問われ

ば、多くの生徒は Landmines と言うだろう。文字通りこの課のキーワードである。次に最初の段落では a danger sign であり、2 番目の段落では killed, injured が関連する重要語となるだろう。このようなキーワードは内容を聞き、読みとる「鍵」となるものである。第 2 段落では、カンボジアの子どもも日本の子どもも森や原っぱで遊びたいものなのだ、と平和な時の子どもの自然な姿を初めに出すことによって、killed や injured とのコントラストが浮かび上がる。

5) 波線を付けた語句に集中してイメージをふくらませる。

4) で波線を付けた語句を、直接・間接を問わず自分の経験に関連付けさせる。各自の経験が違うように、語句から浮かぶイメージも同じでなくてもよい。自分の経験に関連付けるのは、自分の理解に“血を通わせる”ためである。自分の経験に関連付けることによって、理解が語彙と文法によって形成される機械的・表面的な理解から自分の中で生きた理解となる。

6) キーワードやその他の重要語句を手がかりに、どんな順序で文章が展開していくのかを記憶にとどめるように数回音読する。

これは単に音読にとどまらず、スピーキングへの転移となって、生徒にスピーキングに対する自信をつけさせる効果がある。これがさらに高まると、Story Telling へ移行することができるようになる。

2 ストーリー・テリング

ストーリー・テリングを何か上品なパフォーマンスと考えると、多くの生徒はそれだけで気が重くなるだろう。ストーリー・テリングは、事実であれフィクションであれ、それを見聞きしたり、読んだりした経験を、だれか他の人と共有するために語ることである。その語りの中からはじみ出る人間の喜怒哀楽の一面が、聞く人々の心を動かすのである。

1) ソフトウェアにない面白さ

現在、テレビ、CD、DVD、ゲーム機と、音声・映像源が巷に溢れているので、よほど強い自制心を持たないと、その洪水に溺れてしまう危険性がある。その点、ストーリー・テリングは同じ作品でも語る人

によって少しずつ違うという人間的な面白さがあり、これはいつ見聞きしても同じせりふを同じ調子で繰り返す上記のメディアとの大きな相違点である。

最近、コンピュータ用の英語学習ソフトウェアには“インタラクション”を謳い文句にしているものもあるが、それも所詮は人間が考えたプログラムであるから、生身の人間同士のインタラクションとは似て非なるものである。ストーリー・テリングを授業の中に上手に取り込めれば、NEW CROWN の LET'S TALK に加えて自分たちの LET'S TALK をつくることができる。そこには Interactive software にはない人間の生きた感情がある。

2) 対話文もストーリー・テリング風に

音声コミュニケーションが重視されるようになってから、教科書に対話文が増えた。それで本当にコミュニケーション能力が向上したのであろうか。対話文が現在ほど多くなかった時代と比べて、対話文の教え方が向上しているのだろうか。

対話文のインプットとアウトプットが増えて、生徒のコミュニケーション能力が向上しているなら大変結構な話である。しかし、教えている教師の実感がそれと違うならば、対話文の教え方で何か足りない点がないかを考えてみる必要がある。

3) 本物のインタラクションにする

今回用いた NEW CROWN BOOK 2, LESSON 9 では、2 ページにわたって Landmine に関する Ken と Mukami の対話載っている。この対話では Ken がもっぱら聞き役にまわっている。日本の子どもたちは地雷についての直接的な経験がないから、そういう意味では自然な設定であるが、21 世紀において日本人の果たすべき役割を考えると、この教科書を使っている生徒には、国際貢献について中学生なりの意見を入れて創造的な対話にしてほしい。Ken が最後の台詞で So you mean there're many ways to work for peace, don't you? と言っているのだから、平和への貢献として具体的にどんな行動が中学生に可能か、生徒自身が考えることによって、この対話文が Ken と Mukami の fictional な対話で終わるのではなく、血の通った genuine interaction すなわち、「生きた対話」になる。